

山岳会総会次第

平成 24 年 4 月 14 日(土)

午後 3 時から 6 時まで

場所 : 大阪弥生会館

1 開会

2 前年度活動報告

- A) 総括 山田 幹事長
- B) 各幹事報告
 - 企画運営 兵頭 幹事
 - 現役指導 佐々木 副会長 (現役指導幹事)
 - その他

3 「ヒュッテ雪線」関係報告

中嶋 幹事

4 23 年度会計報告及び会計監査報告

- A) 会計報告 (一般及びヒュッテ雪線会計) 上田 幹事
- B) 監査報告 広瀬 監査役

5 役員改選について

福山 幹事

(6 新会長挨拶)

7 今年度活動計画

- A) 総括 山田 幹事長
- B) 各幹事計画
 - 企画運営 兵頭 幹事
 - その他

8 ランタンプロジェクト、シャルバチュム登山計画 伴 副会長

(休憩) (10 分)

9 講演 「地球科学の進歩における大学山岳部の役割」

講師 吉田 勝 氏 (元大阪市大理学部教授、北大山岳部 OB)

以 上

大阪市立大学山岳会役員人事

(平成24年度)

会長	小笹 孝
名誉顧問	池永 薫治
副会長	伴 明 佐々木 惣四郎
顧問	川勝 弘一 廣谷 光一郎
幹事長	山田 裕敏
監査役	廣瀬 秀雄

幹事	福山 昇二
	兵頭 渉 (IT担当)
	藤村 達夫 (事務局)
	澤井 弘忠 (会報担当)

企画運営幹事	上堂 竹壽
	丸子 隆志
	兵頭 渉 (兼任)
	澤井 弘忠
	島川 勝 (山岳部長兼任)
	尾形 達也

会計幹事	上田 忠士
------	-------

山岳部指導幹事	佐々木 惣四郎
	兵頭 渉 (兼任)
	和田 城志
	武部 秀夫

山岳部長	島川 勝
------	------

東京支部長	片岡 泰彦
-------	-------

ヒュッテ運営幹事	中嶋 信正
	兵頭 渉
	大島 一恭

以上

2011年度活動報告

実施月	行 き 先 等	参 加 者
1/15	冬富士	伴、兵頭
1/19	東京支部 新年会	広谷、川勝、山本、他
1/23	新春登山・六甲	島川、上田、他
2/5	新年会 (大阪)	川勝、上堂、小笹、他12名
3/22	チョモランマ壮行会 会友 林さんのチョモランマ登山隊壮行会	藤本夫妻
4/15~4/17	スノーハイキング (柵池・八方) 雲の天狗原、快晴の八方・唐松	山田、兵頭
4/27~5/11	アンナプルナトレッキング BCからの8000m峰の眺望は素晴らしい。	福山、他2名
5/3~5/5	鹿島槍・東尾根 雪稜を辿り北峰、本沢を下降	伴、山田、兵頭
6/17~7/18	アイスランドトレッキング 全行程テント泊、自炊の旅	佐々木夫妻
7/9	六甲山岳部新人歓迎ハイキング	大山(新人)、島川、他
7/16~7/18	駒ヶ根山荘 草刈・外壁塗装 囲碁	雪線運営委員会協賛
7/20~8/4	ドロミテ、サンモリッツトレッキング 南チロルの雰囲気を楽しんだ	上田夫妻
8/17~8/22	剣・立山(現役夏山合宿) 連日の雨で剣・未登頂、長次郎雪渓登降、立山登頂。	大山(現役)、佐々木
8/7~8/20	スイスアルプス・シュレックホルン 4078mの絶頂、辻村伊助と震災と	山田
9/25	珍しい肴で飲む会 「定年悠々」(小林深著)出版記念	小林、小笹、他10名
10/9~10/10	桂木場~木曽駒ヶ岳往復	福山、松本(現役)
10/3~11/7	グルカルポ・リ(ランタンヒマール) 最高到達点5627mまで、24時間の降雪で雪面不安定。	伴、佐々木、兵頭
11/3~11/5	駒ヶ根ゴルフ・囲碁会 (兼山荘清掃)	廣谷会長、他
12/2	創立90周年祝賀会	来賓、会員、賛助会員 60余名
2/19	伊吹山スキー登山	上田、田中、他2名

小笹スキー・スクール

12・1・3	於 夕張	大堀教頭、恒例メンバー
1・2月・3日	於 柵池	兵頭、恒例メンバー

2012年度活動予定

実施月	行 き 先 等	参 加 者
4 月・5 月	近郊登山 関西・関東夫々	都度案内
4 月	ネパールトレッキング	佐々木夫妻、苑樹、福山
4/22～6/7	ランタンヒマラヤ/シャルパチュム登山 シャルパチュム6981m、キュンカ・リ西面偵察	伴、和田
7 月	駒ヶ根山荘 草刈 外壁塗装	雪線運営委員会協賛
	囲碁・ゴルフ会	
8 月	夏山合宿	現役山行に follow
1 1 月	駒ヶ根ゴルフ・囲碁会 (兼山荘清掃)	恒例メンバー
1 2 月	年末 富士山行	伴、兵頭

小笹スキー・スクール

1・2・3月	於 夕張	恒例メンバー
1・2・3月	於 樺池	恒例メンバー

1. 平成23年度報告

① 菅の台別荘地区、下水道整備計画の進捗（兵頭）

本年度は別荘地内、山側道路部の本管工事が開始された。雪線付近の本管工事は平成26年度竣工予定で、27年度以降 各戸から本管への繋ぎ込み工事が実施可能となる。

尚、受益者負担金（予定では320千円／戸）は課徴されない様子。

② 建屋外壁補修塗装（7月行事時）

計画していた建屋外壁の補修塗装（水膨れ状剥離箇所及び周辺部塗膜の除去と再塗装）を行った。特に懸案となっていた 日射に依る劣化の激しい建屋南面の高所や軒下も、天候にも恵まれて 高所作業車を駆使して 全て会員の手で 全面再塗装を完了した。

作業にご協力頂いた皆様 特技を発揮頂いた皆様 本当に有難うございました。

③ 7月行事（7月16日～19日）

上記建屋外壁補修塗装工事、敷地内草刈作業、外階段の再塗装、2F天井梁部の黒カビ除去と通気口フィルター清掃、山行（空木岳、往復9時間、2名）、GOLF（4名）

④ 11月行事（11月3日～5日）

清掃、焼却、GOLF（10名）、囲碁、カバー洗濯等・備品手入れ、

⑤ 水道配管のチェック

正月に台所水道蛇口が凍結。配管系全てをBESSにてチェック。異常無し。

⑥ 京大「笹ヶ峰ヒュッテ」ヒアリング

雪線の今後の運営の参考にすべく、現状のヒアリングを行った。

利用対象者の規模、法人化された大学の所有物である事、利用方法、等 雪線とはかなり状況は異なっているが、互いに利用し合い 交流を深めるべく 考慮中。

2. 平成24年度計画

① 昨年度建屋内外について かなり労力を掛けて手入れしてきたので、今年度は補修計画は特に無い。但し 利用者の方々から頂いた情報を基に 必要なメンテナンスは行う予定。

② 下水道整備計画については当面工事の進捗を見守り、（市）からの情報収集に努める。

③ 薪ストーブ燃料の今年度分は確保済。次年度以降の入手先の具体化検討。

④ 7月行事計画

7月28日（土） 集合・草刈作業

29日（日） 山行・囲碁

30日（月） GOLF 、解散

⑤ 11月行事計画

11月1日（木） 集合・焼却、清掃作業

2日（金） GOLF（伊那国際ゴルフクラブ）、囲碁

3日（土） 山行、

4日（日） 山行、解散

（以上）

地球科学の進歩における大学山岳部の役割ー北大山岳部・山の会を例として

吉田勝・渡辺興亜

第36回国際地質学史委員会日本大会（2011年8月豊橋）で講演

要旨

北大山岳部現役及びOBの会である Academic Alpine Club of Hokkaido (AACH)は、ネパールヒマラヤを主な対象として登山隊を派遣してきた。登山隊はしばしば学術調査隊員を含み、登山の途中に野外調査を実施した。AACHのメンバーはまた、学術調査を目的とする遠征も行なってきた。これらの学術調査は地質学、氷河学、生物学、民俗学などであり、大学院生などの若者が主体であった。彼らは卒業後就職した大学や研究機関などでも指導学生や後輩、同輩ら、時には海外の研究者もまきこんでヒマラヤの野外研究を継続した。

地質学と氷河学分野における彼らの活動は瞠目される。地質学研究はヒマラヤで1955年から、南極で1957年から、パタゴニアは1965年から、ゴンドワナ地域では1985年から行なわれ、いずれも国際的な成果を出してきた。氷河学研究はヒマラヤと南極でそれぞれ1963年と1968年からすぐれた研究が行われてきた。中央ネパールヒマラヤでは30年間におよび氷河の継続的観測が、南極では広大な地域の氷床の質量収支や3000m/72万年に及ぶ氷床掘削が行なわれた。

地質学、氷河学とも、それぞれの地域／領域に関しては、日本から世界に発信する最大の成果となっている。大学山岳部は、地質学などの野外科学における開拓的研究を進めるために必要な資質を学生に与え得るという観点から、その存在価値は大きく評価される。

講演目次

1. はじめに
2. ネパールヒマラヤにおける地質学的調査・研究
3. 南極の地質学調査・研究
4. やまと隕石の初発見と収集活動
5. ゴンドワナランド地域の地質学的研究と学会活動
6. ネパールヒマラヤにおける氷河学的調査・研究
7. 南極における氷河学的調査・研究
8. 結論

配布資料

1. 書評「テーチス海に漂う青い雲」
2. 広告「ヒマラヤントレッカーズガイドブック No.1ーカリガンダキ河に沿う地質と自然災害」
3. 広告「ヒマラヤントレッカーズガイドブック No.2ーエベレスト地域のエコトレッキング」
4. 別冊一部「南極やまと隕石発見こぼれ話（前）1ページ目」

回覧資料

- (1) ダウラギリI峰厳冬期初登頂報告書
- (2) テーチス海に漂う青い雲
- (3) 第1回北大山岳会館講演会、講演資料集
- (4) 氷河と岩と森の国ーパタゴニア調査隊の記録
- (5) ネパールヒマラヤの地質（英文）
- (6) 「ヒマラヤントレッカーズガイドブック No.1ーカリガンダキ河に沿う地質と自然災害」（英文）
- (7) 「ヒマラヤントレッカーズガイドブック No.2ーエベレスト地域のエコトレッキング」（英文）
- (8) 南極・スカルプスネスの地質図幅（南極地質図幅シリーズ Sheets Nos. 6&7、英文）
- (9) 原生代の東ゴンドワナー超大陸大陸の分裂と集合（英文）
- (10) ゴンドワナリサーチ（国際学術誌）（英文）

ヒマラヤントレッカーズガイドブックーカリガンダキ河沿いの地質と 自然災害の観察（英文）出版・販売のご案内

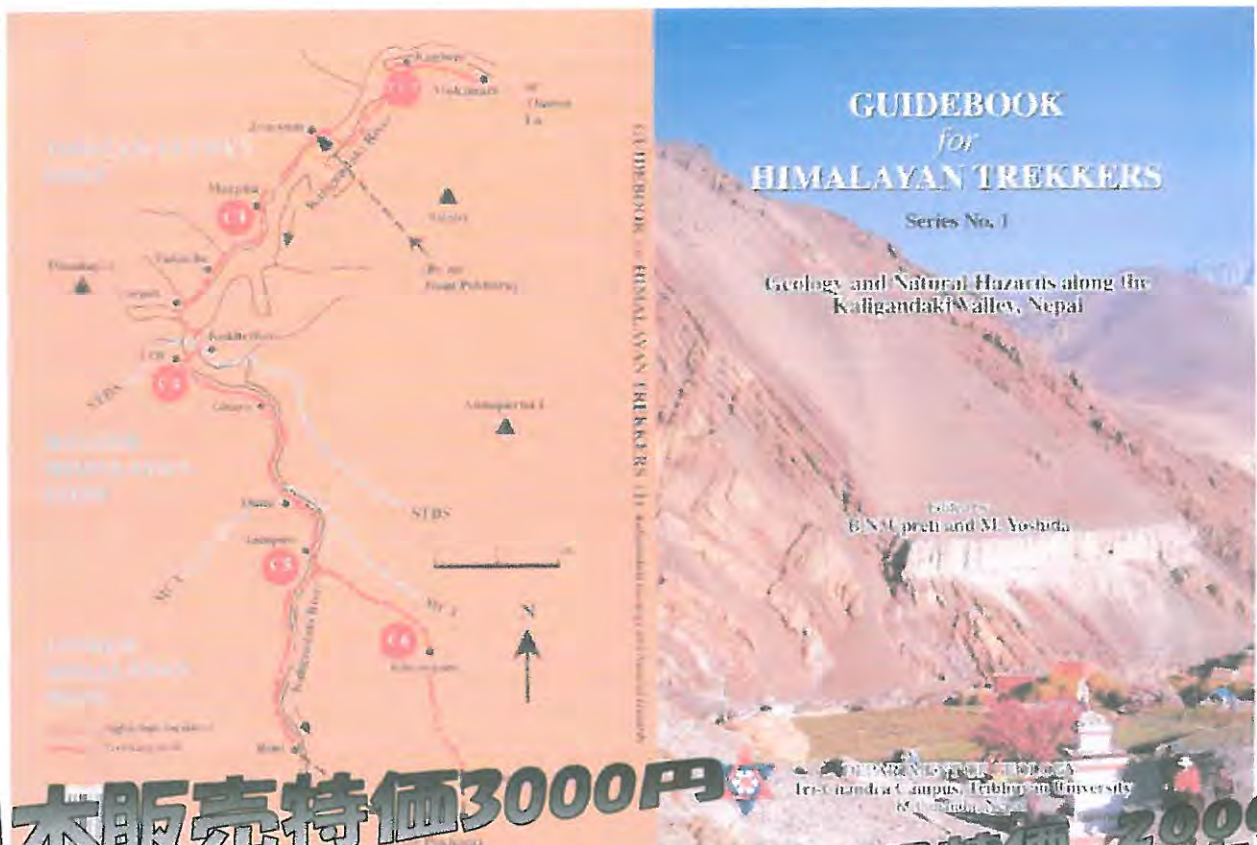
一昨年7月、ネパール国立トリブバン大学地質学教室（カトマンズ市）から表題のガイドブックが出版され、日本でも販売されています。以下にこのガイドブックについて簡単に紹介させていただきます。

ヒマラヤは地球上で最も高く、若く、活動的な山脈で、生きている地球の自然を学ぶ理想的な野外教室です。ポカラの北、アンナプルナとダウラギリに挟まれた世界一深いカリガンダキ河に沿って歩くと、美しい山と溪谷、見事な地質、地形、気候、植物相がドラマティックに変化します。カリガンダキ河は、自然の美しさのエッセンスと、魅力的な地質と地形を観察できる地球上最高のトレッキングルートです。

ガイドブックは、一般にも読み易く、分かり易いように工夫されています。ヒマラヤの生い立ち、地質、地形、気候などの概要から始まり、本の主要部分ではムクチナートージョムソンータトパニーベニルートとポカラ周辺の主な観察地点が、多数のカラー写真や図を添えて説明されています。観察地点を示した10万分の一前後の詳細な地形図も、全行程にわたって添付されています。巻末には文献リスト、用語集、索引、地質時代表などまとめられており、読者の便に供されています。

今回の出版はヒマラヤントレッカーズガイドブックシリーズNo.1で、次のNo. 2はエベレスト地域が計画されています。本書の売上代金は次のガイドブックの発行費用になると期待されています。そんなわけで、ヒマラヤにご関心の皆様にはぜひご購入、ご活用頂きたく、よろしくお願いします。本書はカトマンズの書店や地図店で販売（1冊850ルピー）していますが、ネパール国外の販売はゴンドワナ地質環境研究所（下記）が扱っています。国際価格は40ドルで、日本の販売価格は送料込みで1冊3000円です。

日本販売元：648-0091 橋本市柱本147-2 ゴンドワナ地質環境研究所
ファックス：0736-36-7789 E-mail: gondwana@gaia.eonet.ne.jp



日本販売特価3000円

学生実習用特価2000円
(10冊以上のご注文)

ヒマラヤントレッキングガイドブック シリーズNo. 2 エベレスト地域のエコトレッキング (英文)

Guidebook for Himalayan Trekkers Ser. No.2, Ecotrekking in the Everest Region, Nepal Himalaya (Geology and Environment along the Lukla-Everest Base Camp and Namche - Gokyo Routes)

エベレストトレッキングは素晴らしいヒマラヤの景観とネパール山村の魅力で世界中の人々を惹き付けています。地質学的には低ヒマラヤ帯、高ヒマラヤ帯とテチスヒマラヤ帯が見事な帯状配列をなしているため、興味深い観察ができます。とりわけエベレスト頂上で高ヒマラヤ片麻岩類の上に南チベットデイトッチメント境界で乗っているテーチス層群の様子は有名です。

本書は4回に及ぶ現地の野外調査を踏まえ、トリブバン大学地質学教室教員3人で共同執筆したものです。ガイドブックの前半40ページにはヒマラヤ全体とエベレスト地域の地質と自然の概説で、新旧の重要文献を引用してあります。ガイドブックの主要部約100ページは、全ルートのカバーする5万分の一程度の詳しいカラー地形図と、188葉のカラー写真や図により、173地点の地質と自然観察を説明してあります。一般のトレkkerにも分かるように注意して書かれています。さらに、巻末に詳細な文献リストや用語集等を付けて読者の便を図っています。変形A5版アート紙カラー全192ページです。

本ガイドブックは、シリーズNo.1「カリガンダキに沿う地質と自然災害」とともにネパール国立トリブバン大学の特別出版として発行されました。これらのガイドブックシリーズの売上は、同シリーズNo. 3として目下鋭意取り組み中のランタンヒマラヤ地域ガイドブック作成費用に向けられます。さらに版を重ねることができると、トリブバン大学地質学教室の野外地質研究の経費補助にも向けられるだろうと、教室教員一同大きな希望を持ってNo2を発行しました。ご興味の皆様にはぜひ1冊ご購入下さり、エベレスト地域のトレッキングに、あるいは日本や世界各地の自然災害との比較に等々ご活用下さい。

販売価格はネパールの書店等では950ルピー、海外からのご購入は送料、手数料込みで\$40ドルです。但し送金手数料などの関係で、日本以外でのご購入の場合はVISAカードでのお支払いをお願いしております。

＜ご購入申込み＞

ご購入申込はE-mail、ファックス等で下記までお願いいたします。

ネパール: T.N. Bhattacharai

Department of Geology,

Tri-Chandra Campus, Tribhuvan

University, Ghanta Gar,

Kathmandu

E-mail: tnbbhattarai@wlink.com.np

Tel: 0977-1-4469346

日本: 吉田勝 648-0091

和歌山県橋本市柱本147-2

ゴンドワナ地質環境研究所

E-mail:

gondwana@gaia.eonet.ne.jp

Tel/Fax: 0736-36-7789

＜日本の皆様への特別販売＞

日本の皆様が日本でご購入の

場合、円でお支払い頂けます。

郵送料・手数料込み特別価格1冊3000円です。お支払の方法はVISAカードによる方法のほか、下記の銀行振り込みをご利用頂けます。お振込のご連絡を頂き次第、ガイドブックの発送をさせて頂きます。ご連絡を頂いてから2週間以内にお手元にお届けできると思っています。

三菱東京UFJ銀行 阿倍野橋支店(支店番号072)

口座番号(普通) 5042976

口座名義(法人):ゴンドワナ研究会 吉田勝



テーチス海に漂う青い雲 テーチス紀行編集委員会編



発行所：いゆす，販売：同時代社，2011
年1月発行，変形A5版，570ページ，税
込定価5,000円，ISBN 978-4886836908

1955年の第三次マナスル登山隊に北大から一人の地質学者（北大山岳部OB）が参加して以後，北大関係者（とりわけ山岳部の若者たち）を中心にヒマラヤ地域に対する研究の眼が開かれ，1966年にテーチス地域自然史研究会が発足し，これを引継いで1975年にテーチス協会ができた。この間，北大の学生，院生，若手OBや教員ら数十人が地質学，氷河学，生物学，民族学などをテーマにヒマラヤを訪れた。彼らの仕事の一部は，1975年に「Geology of the Nepal Himalaya」（葉根出版，1974年秩父宮学術賞受賞）として国際的な評価を受けてきたが，その後さらに成長した若者たちはそれぞれ赴任先の大学，研究機関や企業の仕事の中で若い日の活動を一層発展させてきた。

本書の大部分は第I部「紀行」が占めている。北大の若者たちの足は1960年代前半から1981年にかけて，ヒマラヤを中心にパミール，カラコルム，天山まで広がった。その足跡は，それぞれの調査隊の報告書やテーチス協会誌であったテーチスリサーチで発表した紀行や報告として記録された。「紀行」は主にそれらの中から収録された以下の27編で構成している。

1963年北大西ネパール遠征隊関係：2編，1968年北大ネパールヒマラヤ地質氷河調査隊関係：3編，1968年北大中央ネパール生物調査隊関係：7編，1969年北大ネパールヒマラヤ学術調査隊関係：5編，1975年ドウドウコシ学術調査隊及び北大ネパールヒマラヤ学術調査隊関係：3編，1980年北大厳冬期バルンツェ峰遠征隊・1980年ネパール生物学術調査隊・1981年ネパールヒマラヤ氷河学術調査隊

関係：4編，1977年カラコルム中部地域氷河調査隊・1980年青蔵高原科学討論会・1981年中日天山山脈氷河調査関係：3編。これらはいずれも当時の北大の若者たちの生命感溢れた，感性豊かな野外見聞録でもある。その後それぞれに現役の研究者としてさらに調査研究を進展させ，あるいはシニアとして若者たちをリードして国際的な共同研究を展開した人たちの正に青春の記録である。科学的にも価値を持つものも少なくないと思われる。

第II部は「新たな展開」と題されているが，内容は第I部から想像されるものとは全く違う，1980年以後今日までの「展開」の報告3編（以下）からなっている。「ネパール給水プロジェクト奮闘記」は，地質コンサルタントに勤めた著者が，日本政府の無償援助で1988年から1991年まで，ネパール全土の9地域で行った給水システムの開発・供給に携わった記録である。「ネパールでの起業」は，地質コンサルタント業を営む筆者が，1987年から1992年にかけてネパールの若手技術者を共同事業者として育てつつ，カトマンズに環境コンサルタント社を設立し，2008年にはネパール人共同事業者に会社を引き継ぐまでの記録である。「カトマンズクラブハウス顛末記」は，1976年にテーチス協会が会員の寄金を集めてカトマンズに建設したクラブハウスが，遂に終了した2004年まで，北大やその他の大学関係者の学術調査のカトマンズでの拠点として大きな役割を果たしてきた記録である。

巻末には資料として以下の3編が収められている。「テーチス協会（及びテーチス地域自然史研究会）年譜」は同協会・研究会や会員らの活動史を9頁にわたって簡単にまとめている。「テーチス協会出版資料」は同協会・研究会の発行物および同協会員が深く関わった発行物12部のリストで，これらの目次も収録されている。「テーチス協会会員によるヒマラヤ地域学術調査年表1962～1992」は，協会会員個人や会員が参加した調査隊による64の野外調査記録リストである。

「筆者略歴」では，各編の筆者らは34人がそれぞれ10行以内で紹介されている。山田真弓，木崎甲子郎，酒匂純俊，辻井達一，正富宏之，久万田敏夫，安藤久男，大田昌秀，安部水，宮地隆二，後山一朗，橋本正人，中村晴彦，米田功，木村恒美，渡辺翼亜，市村輝宣，市村禮子，松村雄，黒川武，石田隆雄，在田一則，山田知充，渡辺真之，伏見碩二，古川宇一，中須賀常雄，丸尾祐治，横山宏太郎，浜名純，春木雅寛，西村寛，水津重雄，西村浩一。

残念ながら，第II部はI部に比較してわずかなページ数しか割かれていない。実際にはその後彼らが展開した野外科学での成果は質量ともに圧倒的であり，感動的である。せめて彼らの主な成果の紹介とテーチス協会の活動に関連した彼らの主な出版物リストだけでも収録したならば，本書は一層実感と感動を

与えるのではないかとと思われる。それにしても，本書にざっと眼を通して，野外科学の進歩は若者の山歩きから始まることを強く実感するのは私だけではないだろう。北大のグループや関係者らはヒマラヤの地質学や氷河学では，国際レベルで日本の関係学界をリードしている。それらの人々の顔や仕事を思い出しつつ，本書に納められた彼らの若かりし頃の足跡を今の学生たちが目を輝かせて読み，その中から日本の野外科学の更なる発展を担う人材が生まれてくることを夢見たい。

本書は以下に注文すれば著者割引送料込み4,500円で入手できる。浜名純（〒101-0065東京都中央区西神田2-3-2-301牧童社E-mail: junh@par.allnet.ne.jp）又は在田一則（〒064-0944札幌市中央区丸山西町5-2-22 E-mail: arita@museum.hokudai.ac.jp）

（吉田 勝）



新版地質図・報告書類

佐賀地域の地質

下山正一・松浦浩久・日野剛徳 著



（地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）
独立行政法人 産業技術研究所地質調査
総合センター，2010年2月発行，A4版，
97ページ，AIST10-G00522

本書は，産業技術研究所地質調査総合センターが発行している「5万分の1地質図幅付研究成果報告書」であり，日本全国の地質情報資料として長い伝統を有し，最新の成果をとりまとめたものである。日本地質学会会員でその恩恵を受けなかった人はいない広く知られた地質出版物の一つである。この本の対象地域は，九州中北部有明海北岸沿いの筑紫

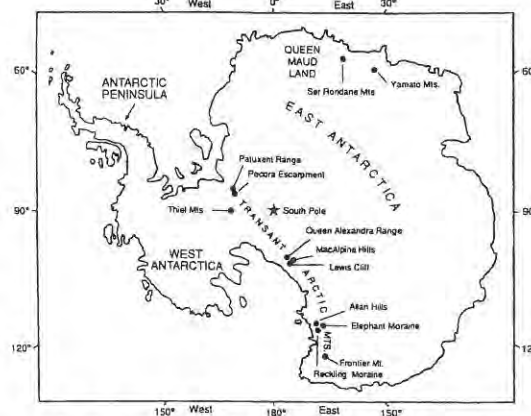
平野中
におけ
以上に
南部の
された
そこ
ほとん
につい
は，こ
れ，特
れている
野の中
合わせ
からこ
版元の
農林水
産
県・福
この平
が行な
の地先
を公表
している
第四
層・段
特に，
としそ
て，数
代測定
よって
した。こ
野を始
変動に
論されて
積層研
究からの
これまで
考え方
各地の
平
題提起
の。
本書は
図が99
内容を
理る。内
容質概
説，郡
変成岩
新第三
紀阿蘇
-4名
遺跡と
の標準
試
び地震
活
応用地
質
構成す
る達
すると
部約200
更新世
以
地質層
序の蓮
池層
新統三
田
層上部
・
部・川
副

南極やまと隕石初発見こぼれ話 (前)*1

吉田 勝*2

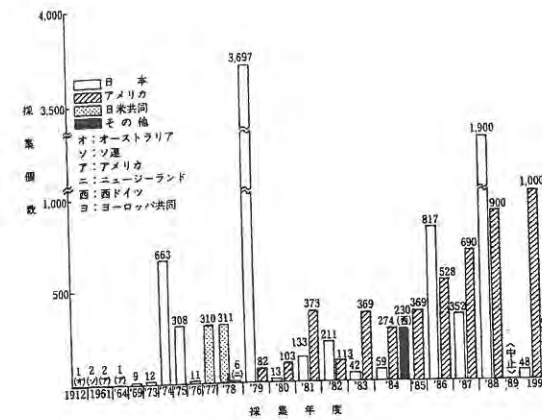
はじめに

1969年12月、日本南極地域観測隊の内陸旅行隊は南極大陸やまと山脈で初めて、いくつかの隕石を採集した。これがきっかけとなって、その後日本南極観測隊は次々とやまと山脈へ隕石採集隊を派遣し、また1976・77年には南極横断山脈でも日米共同で隕石採集を行い、2002年1月まで約16700個の隕石を採集した。その後米国籍、ついでニュージーランド隊、西ドイツ隊、ヨーロッパ共同隊などもこれにならい、特に米国籍は1977年以降も南極横断山脈の各地で多数の隕石を採集し、2000年1月までに9598個を採集した (Grosman and Zipfel, 2001) (第1・2図)。この結果、現在までの南極隕石の発見総数は26800個以上となった*3。1966年発行の隕石カタログ (Hey 1966) によれば、それまでに世界で発見、登録されていた隕石の総数が約2000個、そのうち南極からはたった4個であったことを思えば、この南極隕石*4の数の多さが理解されよう。従って現在、日本は世界の隕石の過半数 (多分60%ほど) を所有している。さらに今後、南極あるいはグリーンランドなどの氷床地域から多量の隕石が次々と採集されるであろう。



第1図 南極の隕石収集地点。Cassidy et al. (1992) から引用

1970年以降、宇宙科学はこのような研究資料の突然の増大によって、新しい段階にいやおうなしに突入した。そして日本の隕石科学は、少なくとも論文数は突然に世界の第一線に突出したはずである。米国のLibrary of Congressが発行しているNISC Discover (Arctic and Antarctic Regions) を検索すると、1965~1970年5年間の隕石に関する論文総数は7 (内日本人の論文0)、1971~1975年には総数29 (内日本人の論文16)、1976~1980年には総数253 (内日本人の論文141) というよう



第2図 1990年までの南極隕石の国別収集個数。矢内 (1993) から引用。

に、隕石に関する論文数全体の急激な増加とともに、南極隕石に関する論文が激増し、その中でも日本人による論文数の増加が目立つ。隕石の物質科学的研究が恐らくほとんどなかったであろう1970年までの日本の宇宙物質科学の状態と比べて隔世の感である。やまと隕石の発見は、人類の科学史のうえでの注目すべき1ページとなるに違いない。アポロ11号による人類の月面到着もこの年であったが、やまと隕石の発見はそれと並んで、太陽系科学にとって重要な事件であったとさえいわれる (永田 1987; 武田 1991)。そんなわけで、やまと隕石初発見前後のこともを記録しておくのは意味あることであろう。

最初の発見

1969年12月21日、安藤久男旅行隊長以下10名の内陸調査隊 (第1表、上田豊・安藤久男・石渡真平・吉川暢一・木村征男・前田祐司・成瀬廉二・小元久仁夫・八木実・吉田勝) は、南極昭和基地を出発して51日目、氷の大陸上に日本隊初めての南極大陸氷床流動と積雪量測定用の250km三角測量鎖の設置を続け、その厳しい作業も終わりに近付きつつあった (第3・4・5図; 第1表) (安藤 1970; 吉田 1970; Naruse et al. 1972)。2台の大型雪上車と2台の小型雪上車を2~4組に分け、早朝から作業を開始した。無線でお互い



第3図 内陸旅行隊行程図とやまと山脈の位置。ぎざぎざの帯は三角測量鎖を行ったところ



第4図 氷床流動観測三角測量ネットの設置作業

に連絡をとりつつ、測量の目標櫓を立て、相互に観測し、数年後の測量目標となるポールを設置し、数km離れた次の測量点へ移動、を繰り返す、夕方に集合するという日課であった。

このような普段通りの日課の中、12月21日午後、成瀬・吉川組が、測量途中に拾ったという直径10cmほどの黒っぽい石ころを私に差し出した。成瀬君は、「吉田さん、これ、隕石でないですか?」という。引き続いて上田・八木組も2個のずっと

*1 本原稿は、1982年に思い立って資料を集め始めた (資1)。その後南極隕石の探査に関する研究小集会 (1987年3月、東京、国立極地研究所) の講演時に草稿を書いた。さらにその後の何度かの講演のつど書き直し、2002年10月、牛来正夫先生追悼文集の機会に校了した。当初は同文集に掲載の予定であったが、同文集編集委員会のお勧めで同文集には要旨のみを掲載して頂き (吉田 2003)、原稿の全体を本誌に投稿した。本文の一部は従って、吉田 (2003) から引用したものである。引用に当たっては、上記文集編集委員会の了承を得ている。

*2 大阪支部 ゴンドワナ地質環境研究所 和歌山県橋本市柱本147-2 gondwana@orion.ocn.ne.jp

*3 1990年以降の米国以外の外国隊のデータの収集が本稿に間に合わなかった。しかし、特別な情報は入っていないので、うえの数字は大きく変わらないと思われる。

*4 南極で発見・採集された隕石すべてを南極隕石と呼び、そのうちやまと山脈で採集されたものをやまと隕石と呼ぶ。私達が採集したNo.1の隕石はYamato691、正式にはY691と命名されている。